十　譯　述

本書の全部を譯述することは、自分にはまだ達成し得ない事であるし、またこの解說の目的でもない。併し上述した所を實際上證明する爲に、若しくは說明の便宜の爲に、こゝに見本として本書の數ケ所を譯載する必要があると考へるから、最後に此の一項を加へて置く。

I、卷首。此の部分には、書名、作者等に加ふるに、第五項に於て述べた巴里ビブリオテーク・ナショナル所藏、漢文の所謂安慧の倶舍論實義疏の初に見ゆる歸敬の頌に對應する所を譯載する。此の頌が兩者全く符節を合する如きものであることは、末に載せたビブリオテーク・ナショナル本の漢文と對比すれば明かである。

（原本は縱書きであるが、今は便宜横に書く）（譯語の下の數字及び—は譯語の續き方を示す）

表 1　阿毗達磨倶舍論實義疏卷第一　印　影

2 abïdarïm sastr taγï činkirtü yörüg-lär ning kingürü ačdačï tigiši baš-
阿毗達磨　論　二　眞實ニ　義　ノ　廣メ　解キト　稱スル〔書〕第　tüzlüg 由ル

3 tïnqï kụụn ㉖ 又 abïdarïm χïïn-lïγ(χ(ï)vïn-lïγ?) košavardï sastr taγï činkirtü yörüg-lär
一　卷(?)　阿毗達磨　權威アル(?)　倶舍疏(kosavṛitti)論　二　眞實ニ　義　tüzlüg 由ル